

濟州島の農業システムと阿蘇の農業システムの比較から

【世界農業遺産に関する調査】

濟州島は火山性の土壌のため、水はけがよく、水田耕作には向いていない。最高峰であるハルササン（1950メートル）では降雨もあるが、それが地下にもぐってしまい、降雨時以外は川には水がない。その地下水は海岸近くで湧き水として流出している。

今回、訪問した薬泉寺は、地下水が湧出する地点を神聖視し、建築されたものと思われる。薬泉寺には流出した地下水による池もあり、薬泉寺より低い川には流水が見られた。

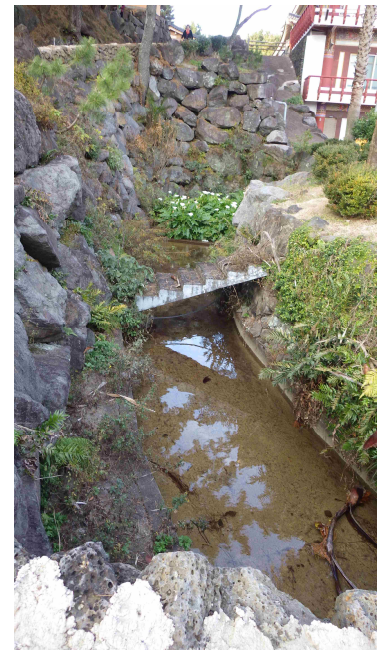
濟州島では古くから粟、稗、麦のほか、陸稲の栽培がおこなわれている。このような畑作地で問題となるのが、窒素肥料の地下水への浸出である。水田の場合は、泥・粘土層が窒素を通さないが、畑作地では容易に窒素が地下水に流れ込み、発がん性物質である硝酸がつくられてしまう。しかし、濟州島の石垣農業システムでは、窒素肥料の地下水流れ込みもなく、持続可能な農業が営まれている。

今回の調査で、濟州島の石垣農業システムにとってキーとなるのが、濟州馬の牧畜であろうという糸口をつかむことができた。濟州馬とはもともと濟州島に自生していた馬と、フビライの時代にモンゴルから持ち込まれたモンゴル馬によってつくられた馬種であり、濟州島では農耕馬、食料、漢方薬の原料として飼育されている。この濟州馬の牧畜によって生じた堆肥を用いた農業が、濟州島の石垣農業システムである。堆肥に含まれる窒素肥料は、地下水に流れ込まないため、硝酸の心配もなく、持続的なのである。

このことは、日本の阿蘇地域の農業にも当てはまるのではないかと。阿蘇地域は、イタリア料理店のシェフである宮本氏が世界農業遺産への登録を推進されたため、阿蘇の赤牛の牧畜から生じた堆肥を用いることで、「阿蘇のおいしい野菜」が注目されているが、持続可能な水の保持と赤牛牧畜の関係も考えられ



薬泉寺:仏教寺院だが地域の神像であるトルハルパンもある



薬泉寺境内の湧出地



中文地区の水のない川



濟州馬



阿蘇の赤牛

る。今後の研究課題としたい。

現在の濟州島では、温暖な気候を生かした温州ミカンの栽培が盛んである。濟州島は風が強い
ため、風力発電の適地であるが、畑作では防風が一つの課題である。そのための防風施設が石垣
とスギである。

濟州島の石垣は、適度に風を防ぐために、
隙間をあけた積み方がされている。隙間がない
と倒れることもあるようだ。また、なぜ、石垣
を築くのかについては、インタビューした農家
の方が異口同音に、畑を掘るといくらでも石が
出てくるから、と答えられた。身近なものを利用
するということである。



石垣とスギ林を用いた防風システム